

群 教 セ	G03 - 02
	平25.251集
	小・道徳

自分と相手の生命を大切にする児童の育成

—道徳的価値の自覚を深める発問構成を通して—

特別研修員 須藤 利恵

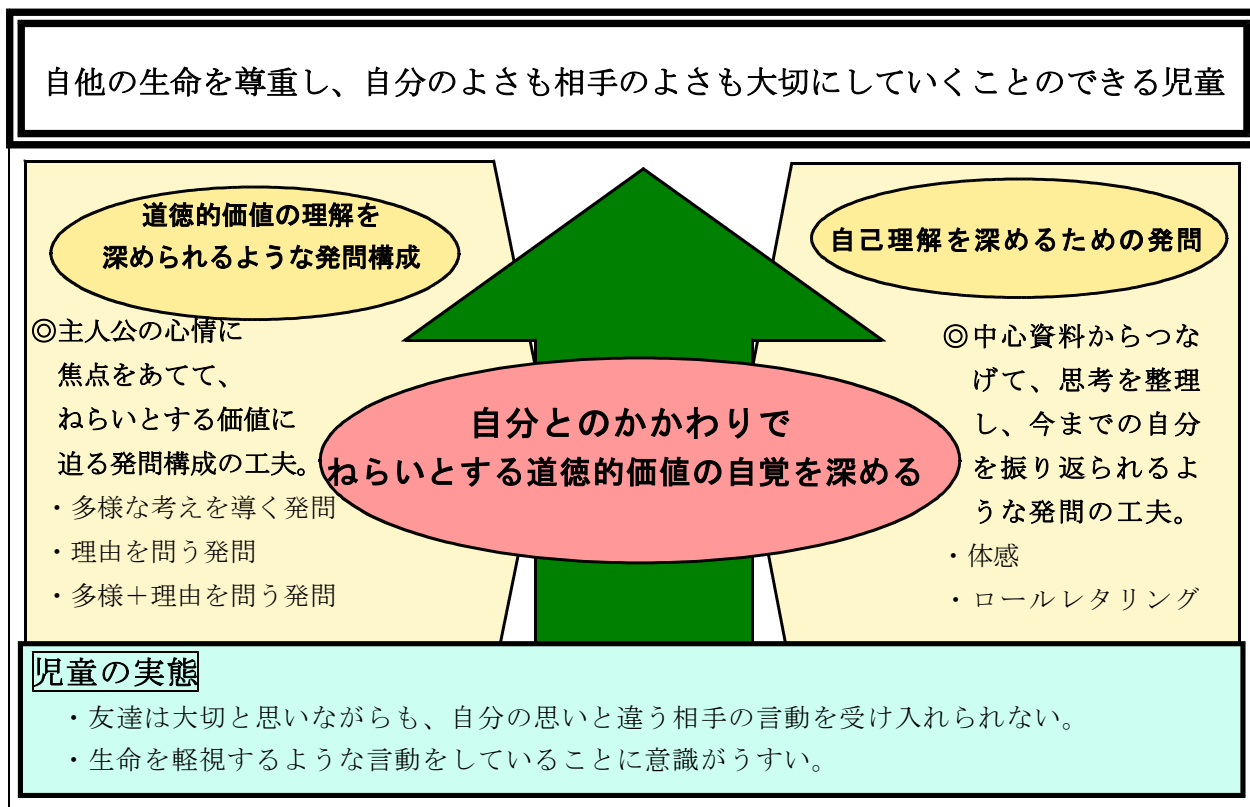
I 主題設定の理由

小学校学習指導要領では、各学年を通じて自律性や自他の生命を尊重する心を育てることに重点をおくよう示している。また、群馬県教育委員会では、はばたく群馬の指導プランにおいて、「大切に

する心」の育成が挙げられ、自分はもちろん身近な友達や人などを大切にできる心の育成を目指すことが必要であると示している。中学年の児童は、仲間や身近な人を意識して自己の在り方を決める傾向が強くなることから、望ましい集団の中で自他のよさを大切にできるように育成していく必要がある。そこで、「大切に

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手だて

道徳の授業において、生命尊重、仲間や身近な人とのつながりなど、自他を大切に

する心の育成を図るために、道徳的価値を自分とのかかわりの中で考えさせる発問構成を工夫した。特に、自他の生命を尊重する児童の育成を目指し、生命尊重に重点をおいて二つの授業実践を行った。実践1では、「生命あるものすべてを大切に

実践1における研究上の手だて

- 「生」に対する迷いから喜びへと変化する主人公の心情に焦点をあてた発問構成をする。
- 主人公の言葉を手がかりに、自分とのかかわりで命について考えられるような発問を行う。

三浦さん（主人公）の心情に焦点をあて、①チャンプと生きていこうと決意したものの迷いを感じる三浦さんの気持ち、②必死にチャンプを介護する三浦さんの理由、③力強くほえたチャンプの姿を見た三浦さんの気持ちと、そのように考えた理由（中心発問）という発問構成にした。

発問から返された児童の意見を視覚的に分かりやすく板書することにも配慮した。中心発問では、発問①、②で明らかになった、三浦さんの心情について理解を深めることができた。自己理解においては、資料にある三浦さんの言葉を用いて「命を感じたことがありますか」と発問した。児童は自分の命を体感することで命を感じることを理解できた。その後、「自分以外に命を感じたことがありますか」と発問して今まで自分が命について考えたことなどを書く活動につなげた。しかし、今までの自分の経験に結び付けることができず、資料の感想が中心になり、表面的に「命は大切だと思った」と書いている児童もいたので、実践2では以下のように改善した。

実践2における研究上の手だて

- 自己理解を深めるためにロールレタリングを取り入れる。
 - ・登場人物の心情を深く理解させた後、その登場人物が自分に手紙を書くとしたらどのような手紙かを考えて書くことで、ねらいとする道徳的価値へ迫る。

ゆきなちゃん（主人公）の心情、①子ども病院に入院する子どもたちの懸命に生きる姿を見たときのゆきなちゃんの様子、②命は電池に似ているけれど、命は電池のように交換できないと気付いたゆきなちゃんの様子（中心発問）という二つの発問で、主人公の心情を明らかにした。

中心発問では、児童から「命も交換できればいいのに」と発言があったので「どうして交換できればいいと思ったのかな」と理由を問う発問を行った。すると児童は「ずっと生きられるから」と答えた。「でも、命は交換できないよね。そのことに気付いたゆきなちゃんは、詩を書いたのだよ」という言葉から、ゆきなちゃんが実際に書いた詩を紹介した。そして、「ゆきなちゃんはどのようなことを考えてこの詩を書いたのだろう」と多様な考えを導く発問を行うことにより、児童はゆきなちゃんが、命ある限り精いっぱい生きようとしている心情を深く理解することができた。その後、ロールレタリングに取り組む時間を設けた。書くことに困難を感じている児童はなく、なぜ命を大切にするのかについて自分の考えを素直に書くことができていた。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 主人公の心情に焦点をあてた発問構成を行ったことにより、児童は主人公の心情の変化を読み取り、ねらいとした道徳的価値である「自他の生命を尊重することの大切さ」を自覚することができた。
- 中心資料とつなげて、児童が自分とのかかわりで自己理解を図れるようにした発問は、児童の思考の流れを止めることなく、ねらいとする道徳的価値の自覚を深めることができた。

2 課題

- 題材によっては、すべての児童が身近な経験を振り返ることができるように、学活や他教科との関連を図り、考える材料を用意するなどの手だてを事前に準備することも必要である。

3 ねらいとする道徳的価値の自覚をさらに深めるために

- 中心発問において、児童の思考を生かしながら、多様な考えを導く発問だけではなく考えをうら付ける理由を問う発問も行うことで、ねらいとする道徳的価値へ迫ることができる。

IV 実践及び改善の実際

実践 1

- 1 主題名 生命あるものすべてを大切にす [内容項目 3 - (1)] (第3学年・2学期)
資料名 「ありがとう チャンプ」(文溪堂:一部改訂)

2 本主題及び本時について

本主題は、命はかけがえのないものであり、それは人間だけではなく、生命あるものすべて同じであることに気付き、命を大切にしようとする心情を育てるものである。本時は、事故に遭った飼犬のチャンプを生かそうか安楽死を選ぶべきか迷いを感じながらも、必死に命をつなぎ、チャンプと共に生きてきたことに喜びを感じる三浦さんの気持ちについて考えることで、生命あるものすべてを大切にしようとする心情を育てることがねらいとなる。道徳的価値を明らかにするため多様な考えを導く発問と理由を問う発問で、中心資料からつなげて自己理解を深められるように発問構成を工夫した。

3 授業の実際

三浦さん(主人公)の心情に焦点をあてて三段階の発問を行った。一つ目の発問は、多様な考えを導く発問で、三浦さんがチャンプと生きていこうと決意するものの、ひどいストレスをためるチャンプを見たときの気持ちを考えた。三浦さんの予想以上にチャンプのストレスはひどかったこと、だからこそ獣医師から勧められた安楽死であったことをしっかりと押さえて発問を行った。

二つ目の発問は、理由を問う発問で、三浦さんがチャンプのために介護をしたのはどうしてなのかを考えた。ここでは、三浦さんがチャンプのために行った介護の一つ一つを丁寧に確認し、板書でおさえ発問を行った。

三つ目の中心発問は、多様な考えを導く発問と理由を問う発問で、最初に泣きながらチャンプを抱きしめた三浦さんの気持ちを考える。そして、児童から出た考えを三つに類型化し、お互いの考えを述べる中で、考えを裏付ける理由を問う発問を行った。

中心発問で出された三浦さんの気持ちを類型化すると次の三つになった。

- ①チャンプがほえた、すごい。声が出てすごい。
- ②キャバを助けてくれてありがとう。
- ③チャンプが生きていてよかった。

この三つの児童の考えの理由は、①三浦さんは声が出ないチャンプを見て辛い思いをしてたから、声が出てよかった、②チャンプは自分の命が危ないときもあったから、そうさせないようにと、すぐに、キャバの命を助けたので、ありがとうと思っている、であった。



図1 発問の流れと児童の反応を書いた板書

③の考えの理由と主題へ迫るために行った発問は以下のとおりである。

中心発問における主題価値に迫る発問と児童の反応の様子

T：三つの気持ちの中で、三浦さんの気持ちに一番近いと思ったものはどれですか。その理由を話してください。

S：チャンプが生きていてよかったという気持ちに近いと思います。理由は、チャンプが生きていたからこそ、声も出だし、キャバの命も助けることができたからです。

T：私も、同じ考えです。安楽死させていたら、声も出ないし、キャバも助けられなかったから三浦さんはチャンプが生きていてよかったと思っています。

S：チャンプが生きていたからこそだね。

さて、それぞれの意見が出されましたね。三浦さんが涙を流して抱きしめた思いには共通点がありそうだね。三浦さんはチャンプのどんなことを喜び涙を流したのだろう。

S：生きていることだと思う。

三浦さんは、チャンプの命を感じたことからチャンプと共に生きることを決意したという話を用い、みんなは命を感じたことがあるか、と児童が今までの経験を振り返られるよう発問を行った。しかし、児童にとっては命を感じることは難しいと予想されたためまず自分の命を体感する活動を取り入れた。その後自分以外の命あるものへ児童の視野が広がるように「自分以外の命を感じたことがあるか」と発問を行い書く活動へつなげた。

書く活動では、人間だけではなく生きているものはみんな命が大切だと思った、などと自分のペットの命について振り返ったり、今まで自分が命について考えたことを振り返ったりするなど、資料から離れて書くことができた。今までの自分を振り返ることが困難で、チャンプが生きていて本当によかったなど、資料の感想を書いている児童もいた。

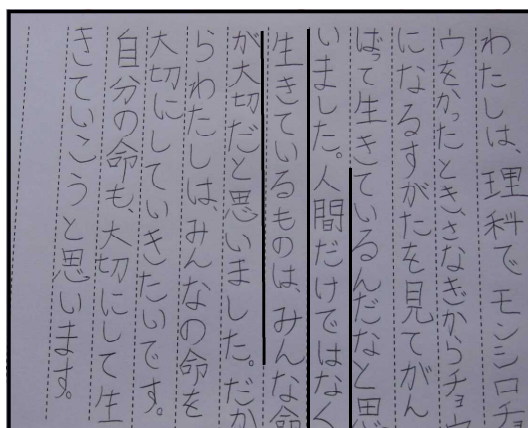


図2 児童が書いたワークシート

4 考察

- 主人公の心情に焦点をあてて発問構成をしたことで、児童は揺れ動く心情の変化を理解することができ、それを振り返りながらチャンプに対する主人公の心情を深く考え、「チャンプと共に生きてきて良かった」というねらいとする道徳的価値の自覚を促すことができたと考え。
- 主題に迫るために多様な考えを導く発問だけではなく、理由を問う発問を行うことで、主人公の心情をより深く考えるきっかけとなり、児童の言葉でねらいとする道徳的価値に迫り、まとめることができたと考え。
- 「三浦さんが命を感じたからチャンプは生きられた」という言葉を用いて自己理解を図る発問をすることによって、児童は価値理解を深めた思考の流れを止めずに自己理解を図ることができ、道徳的価値の自覚を深めることへつなげることができたと考え。
- 「命を感じたことがありますか？」という発問は、難しいと考え、命を体感する活動を取り入れたので児童は、命を感じることを理解することができた。そのため、その後の発問である「自分以外の命を感じたことがありますか」という発問において、今までの自分の経験などを振り返り、自分以外の相手や生きているものの命の大切さやよさに気付くことができたと考え。
- 今までの自分を思い出せず書けない児童がいることを想定し、書く活動の工夫や事前に学級活動や他教科と関連付けて指導を行うなど道徳指導の工夫を行うことも必要であると考え。

実践 2

- 1 主題名 「かけがえのない命を大切にする」 3 - (1) 生命尊重 (第3学年・2学期)
資料名 「電池が切れるまで」(角川文庫)

2 本主題及び本時について

本主題は、命には限りがあることについて考えることで、命のかけがえのなさに気付き、自己の命を大切に精いっぱい生きていこうとする心情を育てていくものである。本時は、病氣療養のため院内学級で学ぶのゆきなちゃんが命は電池に似ているけれど、電池のように交換することはできないと気付いた気持ちについて考え、かけがえのない命を大切にしようとする心情を育てることをねらいとした。ゆきなちゃんの心情をより深く理解し、中心資料からつなげて自他のかけがえのない命について考えを深められるようにするため、本時の発問と書く活動の工夫を次のように行った。

3 授業の実際

ゆきなちゃん(主人公)の心情に焦点をあてた二つの発問を行った。一つ目の発問では、まず多様な考えを導きながら、主人公がそのように考えた理由について問うた。病気の再発により再入院することになり不安だったゆきなちゃんが、同じく子ども病院で病氣と戦いながら生活する友だちの姿を見たときの気持ちを考え、「子ども病院の友だちもゆきなちゃんも苦い薬を飲み、痛い治療を我慢してまで生きたいのは、なぜなんだろう」ということについて考えた。

二つ目の発問が中心発問で、多様な考えを導く発問と理由を問うた。命は電池に似ているけれど、命は電池のように交換できないと気付いたゆきなちゃんの気持ちとその理由を考えた。児童の反応を二つに類型化した後、児童同士の意見交流を行い、その後、ゆきなちゃんが実際に書いた「命」の詩を紹介し、ゆきなちゃんの気持ちを問う発問を行うことでねらいとする道徳的価値へ迫った。

中心発問における主題価値に迫る発問と児童の反応の様子

(中心発問後児童の考えをまとめながら、①どうして命は交換できないのだろうか。交換できたらいいのに。②命は交換できないのだから、大切に生きていこう。と類型化した。)

T:大きく二つの意見が出てきました。ゆきなちゃんは、どちらの気持ちに近かったと思いますか？
それはなぜですか？ ペアで話してみましょう。

T:では、友だちに伝えた自分の考えを発表してください。

S:ぼくは、命は交換できないから大切に生きていこうと思ったと思います。理由は、命は一つしかないからです。

R:私は、命も交換できたらいいのにと考えたと思います。なぜなら、そうすれば、生き続けられるからです。

T:命が交換できれば、ゆきなちゃんも生き続けられるよね。でも、命って交換できるの？

R:できない。

T:そうです。命は交換できないんだよね。それに気付いたゆきなちゃんは、実はこのような詩を書いています。これは、命は電池に似ているけど交換できないと思ったときに書いた詩です。

どんな気持ちで書いたと思うか、考えながら聞いてください。

(拡大したゆきなちゃん直筆の詩を掲示し範読)

T:ゆきなちゃんは、どのような気持ちでこの詩を書いたと思いますか。

S:命は絶対交換できない。

このように、ゆきなちゃんの直筆の詩を提示し、改めてゆきなちゃんの気持ちを考えさせたことで、児童は命について、「絶対交換できないもの」「誰にとっても大切なもの」「命はむだにはしてはいけない」などと発表することができた。その際、考えた意見についての理由も述べることで、ゆきなちゃんの「命」に対する思いの深さに共感することができていた。この後、ゆきなちゃんは亡くなったことを伝えた。短命ではあったが、ゆきなちゃんは命ある限り精いっぱい生きてきたことを伝え、そのゆきなちゃんがあなたへ手紙を書くとしたらどうするか発問し、ロールレタリングへつなげた。

自己理解を深めるためのロールレタリングと児童の活動の様子

T: ゆきなちゃんは命ある限り精いっぱい生きました。このゆきなちゃんが、あなたに手紙を書くとしたら、どのような手紙を書くとおもいますか？書いてみましょう。

S: (児童の書いた内容)

・□□さん、人間にとって一番大切なものは自分に一つしかない命です。電池はすぐに交換できるけど人間の命はなくなったら絶対に交換できないのです。だから、命がなくなるまで絶対に精いっぱい生きてください。命はだれにとっても大切なものです。

事前に資料内容の一部を伝え、児童はゆきなちゃんに向け、「きっと治から頑張るね」などと手紙を書いた。そのため、予めゆきなちゃんの状況について理解できていた児童はゆきなちゃんになったつもりで自分への手紙を書くことを困難に感じていなかった。どの児童も共通して手紙の中に書いていた内容は、命は一つしかない、命は交換できない命には限りがある、だから大切に生きていくということであった。児童は、ただ命を大切にではなく、なぜ命を大切にするのかという自分の考えをロールレタリングによって書くことができた。

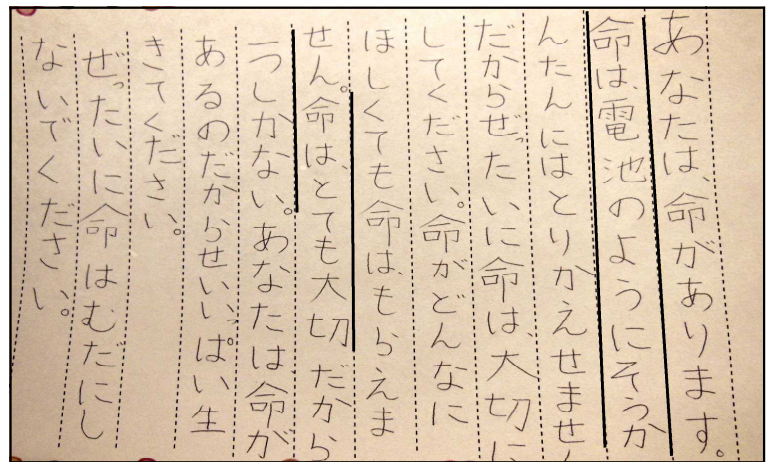


図3 児童の書いたワークシート

4 考察

- 中心発問において、多様な考えを導く発問をし、児童から出された考えを大きく二つに分けてから理由を問う発問を行って意見交流をすることで児童は他者理解を図ることができた。そのことにより、自分の意見のよさも相手の意見のよさも理解することができたと考える。
- 意見交流後、「命も交換できればいいと思っている」という児童の意見に対して理由を問う発問を行い深く考える場を設けた後、詩を紹介して改めて多様な考えを導く発問を行うことで、児童はゆきなちゃんの「命」に対する思いの深さに気づき、命ある限り精いっぱい生きることの大切さについて理解できたと考える。
- ロールレタリングを取り入れたことで、「命」に対する自分の思いを児童一人一人が深めて書くことができた。「命」のように、身近な経験の中で大切にしているかどうかなど考える機会が少ない主題価値においては、ロールレタリングのような手法が効果的であると考えられる。
- ゆきなちゃんの「生」に対する前向きな気持ちに焦点をあて発問構成したことで、児童は生きることへの希望について考えることができた。しかし、再入院した際にゆきなちゃんは不安を感じたのも事実であるので、この不安な気持ちについて考える発問をすることで、それでも前向きに生きていこうとするゆきなちゃんの気持ちについて考えさせる発問構成も考えられる。